

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 南玲子

南玲子さんの学位請求論文『スタンダールの《民族学》 — 《人間研究》から《文学的創造》へ —』は、作家スタンダールの中で常に関心の中心を占めていた、「人間の理解」という問題が、いかに同時代の民族学的、人類学的関心と密接に結びついているかを論じた、野心的論考である。本論文で筆者は、小説としての処女作『アルマンズ』(1827)を発表する以前、スタンダール＝アンリ・ベールが、『イタリア絵画史』(1817)、『恋愛論』(1822)をはじめとする様々なテキストにおいて、フランスを含むヨーロッパの様々な地域の国民性の分析を試みようとしていた、という事実に着目し、経験や事実を重視するスタンダール＝アンリ・ベールの方法論と、黎明期にあった当時の民族学的・人類学的方法論の類似性を、膨大な資料にあたって説得的に示した。本論文は、通常、文学プロパーの研究対象となることの多いスタンダールの作品を、同時代の知の動向の中に位置づけようと試みた、完成度の高い、地域文化研究の佳作であると言える。

本論文は、「序論」と、それに続く、「第 I 部 フランス人類学・民族学の黎明期」、「第 II 部 スタンダールによる《人間研究》の原点」、「第 III 部 方法としての旅行」、「第 IV 部 『恋愛論』に見る《民族学》の可能性」の四部から構成されている。

序論で、論文全体の意図と構成が示された後、第 I 部では、スタンダールの問題意識の背景となった、1800 年前後の、人類学・民族学の動向が述べられる。筆者は、2002 年に刊行された Jean-Luc Chappey の博士論文、*La Société des Observateurs de l'homme (1799-1804)* に従いながら、この時期のフランスにおける人類学・民族学の活動が、従来言われてきたように、総裁政府下で国立学士院第 2 部門の中核をなしていた、デステュット・ド・トラシーら、いわゆるイデオログたちだけによって担われたのではなく、イデオログたちと時には対立した、ジョゼフ＝マリー・ド・ジェランドら、「人間観察者協会」の会員らも、重要な役割を果たしていたことを明瞭に示した。この第 I 部ではまた、スタンダールと特に関わりの深い、モンテスキューとスタール夫人による国民性分析についても論じられている。

続く第 II 部から第 IV 部が、スタンダールにおける人類学・民族学的関心の分析にあてられる。

まず第 II 部では、やがて「国民性」の研究へと発展していく、スタンダールの人間研究の原点が詳述される。冒頭で、医師であった祖父アンリ・ガニョンが孫アンリに及ぼした影響の可能性について検討されたあと、人間研究のために厳密な方法論を模索していたス

スタンダールが、ついに、彼に決定的な影響を与えることになる、デステュット・ド・トラシーの『イデオロギー提要』及び『論理学』の二作と出会うまでの経緯が詳述される。

第 III 部では、スタンダールの人間研究の中で、「旅行」の果たす役割が論じられる。筆者によれば、スタンダールに、人間観察における旅行の重要性を教えたのは、イデオログの一人であったヴォルネーの旅行記であった。ヴォルネーは、今から 200 年以上前に、既に「参与観察」型の現地調査を行った人物であり、スタンダールは、彼の『シリア・エジプト旅行記』や『合衆国のタブロー』などの著作から、大きな影響を受けたという。

この第 III 部ではまた、スタンダール自身が、フランス国内や、ドイツ、イタリアへの滞在型「旅行」を通じて、どのような観察と記録を実現しえたかが、具体的な作品の分析を通じて示される。

最終の第 IV 部は、1822 年に出版された『恋愛論』の分析にあてられる。従来、この本は、恋愛の様々な型や、恋愛の発生とその心理が叙述される第 1 部が注目されることが多かった。しかし本論文では、その第 2 部が主として取り上げられ、その中心を占める、風土や気質の違いによる恋愛の諸相の記述が、この時期のスタンダールの、「民族学」の集大成として示される。

本論文はまた、この同じ『恋愛論』の改訂版に付け加えられた「ザルツブルクの小枝」と「エルネステューヌ」の二つの小編にも注目し、その中に、スタンダールの民族学的関心が、ついに、文学的創造へと発展していく契機を見て取っている。

以上のように、本論文は、『恋愛論』までの、スタンダールにおける民族学的関心を、様々な角度から、詳細綿密に検討している。

本論文の特筆すべき長所の第一は、従来、少なくとも日本においては、ほぼ常に、文学プロパーの研究対象とされてきたスタンダールの作品を、より広汎な、同時代の思潮の中に置き直そうとした積極的姿勢である。このことによって、これまで、漠然と「人間の理解」への関心としてのみ捉えられてきたこの時期のスタンダールの問題意識が、黎明期の人類学・民族学の問題意識とも通底する、より深い、時代関心に根ざしたものであることが示された。

本論文の第二の長所は、以上の視点からスタンダールの作品を論じる際の、筆者の論述の手堅さである。本論文に誤字・脱字・表記の誤りなど、形式的欠点がほとんど見られないことについては、複数の審査員から言及があったが、資料の分析の的確さ、記述の明瞭さまで含め、本論文はきわめて完成度の高いものとなっている。

審査員の評価はいずれも好意的なものであった。以下、審査員から提出された疑問点のいくつかを列挙する。

1) 論文中に、「グローバル化」と、一律の「規範化」を同一視している箇所があるが、この二つの事柄は区別すべきではないか。

2) 論文では、スタンダールを含めた、18 世紀末・19 世紀初頭の、黎明期の人類学・民族

学が、現在の人類学・民族学に断絶なくつながっているように叙述されているが、実際にはその間に、様々な断絶が存在しているのではないか。

3) 相対主義者であるはずのスタンダードにおける、地方に対するパリの特権視については何らかの説明が必要なのではないか。

しかし、これらの疑問点も、本論文の質の高さを本質において損なうものではない。また、審査員からの様々な質問に対する筆者の回答も、ほぼ満足のいくものであった。

上述の様々な長所によって、今後本論文が、多くの研究者によって参照されるべき、基本的文献の一つとなることは間違いない。

以上から、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。